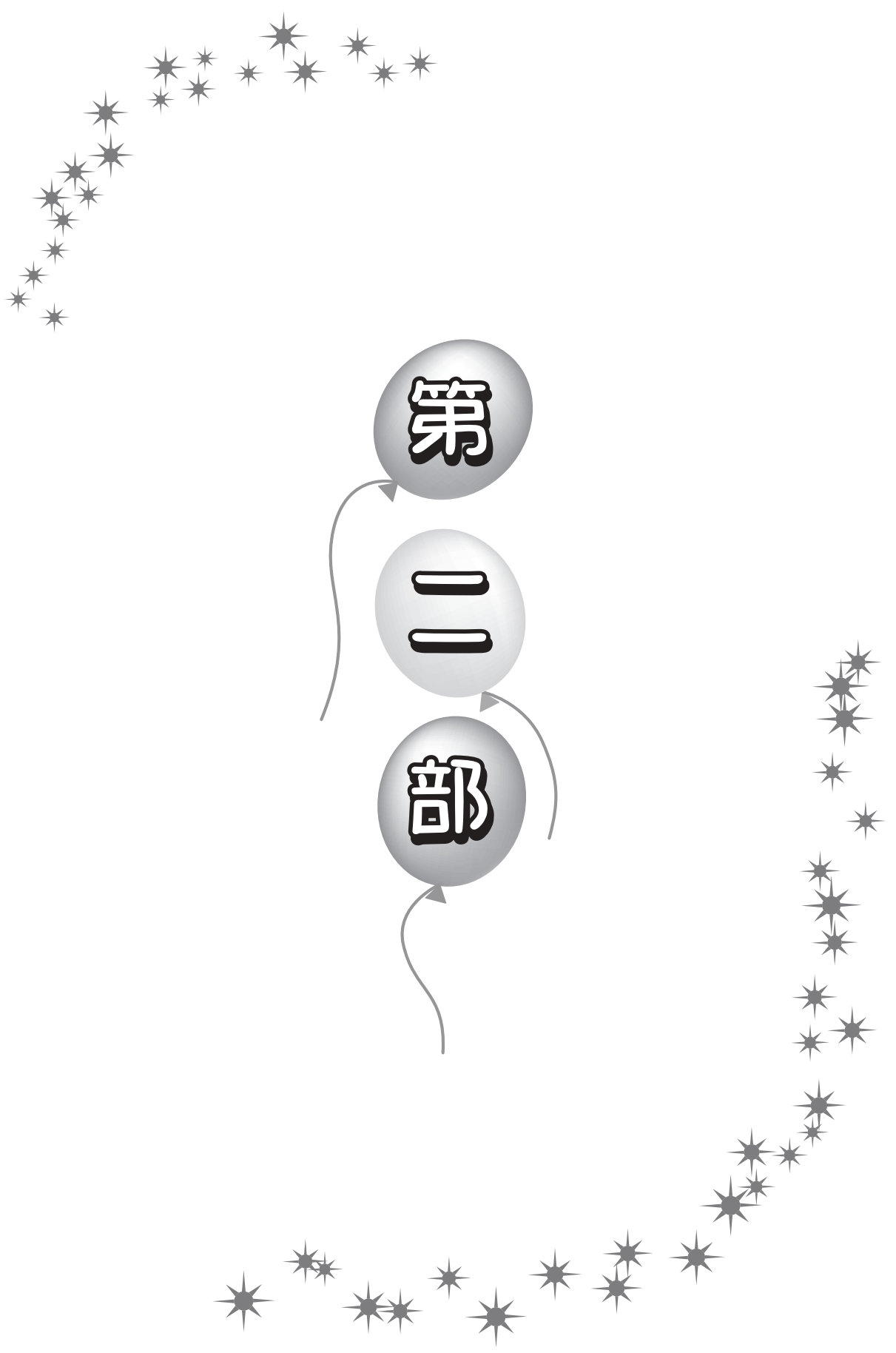




第

二

部

ふゆしょうぐんにつき
冬將軍日記

関根 裕治

じゅうにがつにじゅういちにち
十二月二十一日（晴れ）

きょう
今日からぼくは、日記をつけることにした。

にっき
「日記」といっても、毎日（まいにち）は書けないと思う。計算（けいさん）ドリルの宿題（しゅくだい）が多い（おおい）日は、夜遅（よるおそ）くまでかかりつきりになってしまいうし、すもうクラブの練習（れんしゅう）がきつい（ひ）日は、つかれて早く（はや）寝（ね）てしまうから。

まいにち
それに「毎日（まいにち）書かなきゃ」というプレッシャーがあると、ぼくは長続（ながつづ）きしないんだ。
「書（か）けるときに書（か）く」とか「変（か）わったことがあった日（ひ）に書（か）く」くらいにしておかないと、三日坊主（みっかぼうず）で終わ（お）ってしまいう。

にっき
日記帳（にっきちやう）は今日（きょう）近所（きんじよ）の文房具屋（ぶんぼうぐや）さんで買（か）ってきた。小学校（しょうがっこう）の友だち（とも）の中には「日記（にっき）はブロ

グに書いている」という人も多い。そういうのが流行ってるんだ。でも、ぼくは日記を人に見られるのは恥ずかしい。それに、人に読まれると思うと、かっこつけたりして、正直なことが書けなくなる気がする。ぼくはなるべく起こったことや思ったことを正直に書きたい。人にナイショにしていることも書きたい。だから紙の日記に書く。しかもこの日記には鍵がついているので、勝手にだれかに読まれる心配がない。

こういうのって新しい年になってから始めるのがふつうだと思うんだけど、ちょうど冬休みに入ったので、今日から始めることにする。

とりあえず今日のところはこのへんで。

十二月二十五日（こはるびより）

今日は朝からぼかぼかしていた。冬なのに春みたいにあたたかい日を「こはるびより」と言うらしい。これは前におばあちゃんが教えてくれた。それで、日付の下にそう書いてみた。

朝から天気が良かったので、ぼくはまず洗濯物を干すために庭に出た。ぼくはおばあ

ちゃんと二人で暮らしているんだけど、洗濯物を干すのはぼくの役目なんだ。おばあちゃん、腰をのばして仕事をするのがつらかったりするのです。

洗濯物を干し終えたら、庭が落ち葉だらけだったのに気づいた。よし、ついでに落ち葉も掃いておこうと思い、ほうきがしまっている納屋を開けた。

すると、ほうきの横にうずくまっている人影のようなものが見えた。

ぼくは、ビックリして納屋を飛び出した。でも、ほんとうに人がいたら困るので、もう一度おそろおそろのぞいてみた。

そこにいたのはやっぱり人だった。体育座りをして、なんだか申し訳なさそうにうつむいている。

「あのう……、どちら様？」

とたずねると、

「あ、あの……フュシヨウグンです」と答える。

「フュシヨウグン？」

「はい、冬の將軍で、冬將軍です」

「冬將軍……」

冬將軍と言え、冬のきびしい寒さを人にたとえた表現だったはずだ。前に授業で教わったことがある。寒波がおとずれると、天気予報などで「今年も冬將軍が到来しました」なんて言い方をすると。

ところが、目の前にいる冬將軍はちゃんと人の姿をしていた。しかもヨロイを着て、カブトをかぶり、まさに將軍様のかっこうをしていたのだ。カブトの正面には大きな「冬」という字の飾りがついている。

「こんなところで何してんの？」

「まだ出番がこないのので待機しているんです」

「出番って？」

「ほんかくてきに寒くなったら、わたしの出番なんです……」

「うーん。たしかに今日は冬にしてはぽかぽか陽気だけど」

「ですよ？ もっと寒くなれば堂々と『冬將軍参上！』と出て行けるのですが」

ぼくは、なんだかあべこべのような気がしてたずねた。

「冬將軍が寒くしてくれるんじゃないの？」

「いいえ、そんな力ちからはわたしにありません。寒さむくなつてはじめて街まちに出て行けるのです。そうすれば、雪ゆきを降ふらすことくらいはできるのですが」

「雪ゆきを降ふらすことはできるんだ？」

「はい。でも、このあたたかさじゃ、とてもホワイトクリスマスなんて無理むりですよ。そんなプレッシャーかけられたって……」

そう言いって冬将軍ふゆしょうぐんはまた下したを向むいてしまった。

そういえば今日きょうはクリスマスだった。たしかに雪ゆきのクリスマスになればロマンチックだろうし、街まちのみんなもそう望のぞんでいるかもしれない。でも、ぼくもプレッシャーには弱よわいので、期待きたいをかけられて辛い冬将軍ふゆしょうぐんの気持ちきもちがなんだか分かる気がした。

「もう少し寒さむくなるまでここにいさせてもらえませんか？」

と何度なんども冬将軍ふゆしょうぐんが頼たのむので、ぼくは気きの毒どくになって、

「うちに上あがれば？」

とすすめてみた。しかし、冬将軍ふゆしょうぐんは

「いいえ、なるべく人ひとに見みられたくないので」

と言う。ぼくは、

「うーん、別にかまわないけど」

と言って、そっと納屋の戸を閉めてやった。

そんなわけで、ぼくの家いえの納屋なやには今いま、冬将軍ふゆしょうぐんがいる。おばあちゃんに話はなした方ほうがいいかどうかまだ迷まよっている。

いちがつついたち
一月一日（はつひので）

今日は元旦げんたんなので、朝あさから親せきがたくさん来ていた。にぎやかなお正月しょうがつだった。

夕方ゆふがた、みんなが帰かえったところで、ぼくは庭にわに出てそっと納屋なやの引き戸ひどを開あけた。さつき差さし入れいしたおせち料理りょうりの残りのこは、すっかり平たいらげられていた。ぼくは、あれから毎日まいにちご飯はんやおかずの残りのこを差さし入れいしていたんだ。

ふゆしょうぐん
冬将軍は言いった。

「ごちそうさまでした。今日きょうのはまたかくべつに美味おいしかったです」

「そりゃ、そうさ。おばあちゃんが作つくったおせちだもん」

「おせち？」



「お正月のとくべつ料理さ。今日から新しい年だから、そのお祝いで」

「ああ、それで。ということは、もう年が明けてしまったのですね？」

「うん」

「それなのに、わたしの出番はまだ来ないみたいです」

「出番とかいいからさ、もういいかげんにこんなところから出てきて、うちに上がりなよ」

ぼくはこの一週間、ずっとそう言いつづけてきたんだけど、冬將軍はえんりよして家に上がろうとはしない。

「だって、わたし仕事してないし」

と、いじけながら爪をいじっている。

「しょうがないじゃん。学校の先生が言ってたけど、二酸化炭素だとかフロンガスだとかの影響で、地球は冬でもあまり寒くなくなっちゃったんだって。よく分からないけど、とにかくきみのせいじゃないよ」

ぼくは、そう言って強引に冬將軍を納屋から引きずり出した。冬將軍は申し訳なさそうにしながらも、ようやく縁側から居間にあがってきてくれた。

こうなるともう隠しつづけているわけにはいかない。いよいよ、おばあちゃんに説明し

なくちゃならない。

すると、台所の方からおばあちゃんが顔を出して、

「おや？ どちらさんだい？」
と聞く。

「えっとー、その、つまり、この人は……ぼくの友だちというか……」
と、説明に迷っていると、おばあちゃんは

「なあんだ、お友だちかい？ じゃあ、早くあがんなさいな」

と言って、冬將軍を招き入れた。そして、

「ほら、うちに上がるときはそんなコートや帽子は脱ぎなさい」

と言って、冬將軍のヨロイとカブトを脱がした。ヨロイの下は真っ白な着物で、カブトの下はちよんまげ頭だった。

夜になると、おばあちゃんは冬將軍をお雑煮でもてなしてくれた。まったく怪しんだり疑ったりしなかった。しかも、

「いくらでも泊まっていきなさい」

と居間に布団まで敷いてくれた。

おばあちゃんは、やっぱりすごいや。

いちがつなのか
一月七日（しぐれ）

始業式しぎようしきが終わおって急いそいで家いえに帰かえると、冬將軍ふゆしょうぐんは使つかわれなくななった火鉢ひばちを背せもたれに
して、ぼくのポータブルゲームをいじっていた。

「これ難むずかしいですね」

と冬將軍ふゆしょうぐんは顔かおをしかめているし、外そとは雨あめが降ふっているんで、ぼくらは居間いで花札はなふだをやるこ
とにした。ぼくは冬將軍ふゆしょうぐんに「こいこい」のルールを説明せつめいした。札ふだに描えがかれた季節きせつの絵えを合
わせて、得点とくてんを競きそう遊あそびなんだよと。

ところが、冬將軍ふゆしょうぐんは得点とくてんに関係かんけいなく、「桜さくら」や「菖蒲あやめ」の札ふだはすぐすに捨すててしまい、
「桐きり」や「松まつ」の札ふだばかり集あつめている。（それは冬ふゆの札ふだだ） しかも、カスの札ふだばかりを
集あつめてしまう。

「すつきりしてる絵えが好すきなんですよね」
とか言いって。

これでは、ぼくばかりが勝ってしまつて面白くない。そこで、花札はやめて将棋をさすことにした。

すると、ちよつとルールを説明しただけなのに、今度は冬將軍ばかりが勝つのだ。

「シヨウグン、すごいじゃないか！ 将棋は得意なんだね？」
と聞くと、

「うーん。なんかこれ、いくさの戦略に似てるんですね」

と恥ずかしそうに答えた。さすがに將軍だけあって、いくさの戦略には慣れているみたいだ。布陣の組み立て方が抜群に上手かった。「歩」も「金」も「銀」も見事に使い、ぼくの駒をけつして「王将」に近づけなかった。

「ちえつ。降参だよ、シヨウグン」

今度は、冬將軍ばかりが勝って面白くなかった。

そんな風にあれこれ試しているうち、トランプなら対等に戦えることを発見した。それで、ぼくらは「ババ抜き」に夢中になった。これならルールは簡単だし、ぼくが勝ったり、冬將軍が勝ったりでちようど良かった。冬將軍は、

「このゲームを考え出した人、天才ですね」

と言った。熱中しているうちにすっかり夜になってしまった。
おばあちゃんが、七草粥を作ってくれたので三人で食べた。

一月二十日（うららか）

庭には小さな陽だまりができていて、はやばやとフキノトウの芽が出ていた。

こんなうらかな陽気ではまだ出番が来ないようで、冬將軍は居間のテレビで古いビデオばかり観ていた。雪に埋もれる北国のようすをえがいたドラマだった。

ぼくはふと、大晦日にやり損ねた仕事を思い出した。障子紙の貼りかえだ。去年の大晦日は、家の大掃除をしたり、冬將軍に差し入れをしたりで忙しく、すっかり忘れていたのだ。

そこで、ぼくは冬將軍に障子紙の貼りかえを手伝わせることにした。

冬將軍は、手ぎわよく糊をぬり、シワにならないようにていねいに障子紙を貼った。

「シヨウグン、上手じゃないか！ 意外と手先が器用なんだね」

と言うと、冬將軍は照れながら

「そうでしょうか。きれいにできるといいんですけど」

と嬉しそうに言う。

冬將軍が貼った和紙をとおして、あたたかな陽射しが居間にそそいだ。今日が、一年を通していちばん寒い日であるはずの「大寒」であることは、言わないでおくことにした。

冬將軍は、障子の最後の段を貼り終えると、ふーっと一息ついて、

「ところで、純クンはどうなるんですかね？」

と言った。純クンというのは、北国のドラマの主人公だ。冬將軍は物語のつづきが気になつて仕方がないらしい。

夜にはおばあちゃんが、だんご汁を作ってくれたので、三人で食べた。お味噌仕立てで、フキノトウも入っていて美味しかった。

二月三日（花曇り）

明け方、縁側から庭を見ていたら、梅の木につばみがほころんでいた。枝にとまったメジロが楽しそうに歌っている。まもなく春がやってくる。



居間の片隅で、なにやらガシャガシャとさわがしい音がしたので振り返ると、冬将軍がヨロイを着てカブトをかぶっていた。

「あれ？ どうしたの？」

と聞くと、冬将軍は、

「そろそろ行かなければならないのです」

と答えた。

「え？ どうして？」

「はい、もう帰る合図がありましたので」

「帰る合図？」

そう聞くと、冬将軍はこくりとうなずいて、庭の方を指さした。

「メジロさんが歌い出したら、わたしの役目は終わりという合図なのです。と言っても、今年は何のお役にも立てませんでした」

「そ、そんな……」

冬将軍は姿勢を正して、ゆっくりと頭を下げ、

「たいへんお世話になりました」

と言った。ぼくの頬につうっとひとすじの涙がこぼれた。

「そんなのイヤだよ！ 帰っちゃったら、もうおばあちゃんの料理食べられなくなっちゃうんだよ？ それでもいいの？」

「決まりですから仕方ありません。春に冬将軍がうろうろしてたら、色々ややこしいことになりますので」

「うろうろって……。じゃあ、家から出なさいいいじゃないか。ここで一緒にババ抜きをしてようよ」

「残念ながら、そういうわけにはいかないのです」

「ドラマだって見終わってないんでしょ？ このあとの純クンを見届けなくてもいいの？」

「つづきは今度見せてください。それでは」

そう言っ冬将軍は、縁側から庭に降り立った。ぼくは慌てて冬将軍の手をつかんだ。

「ちよっと待ってよ！ それならせめて……。え？ つづきは今度？」

「はい、今度」

「今度って……。またここに來てくれるの？」

「きっと」

「いつ？」

「たぶん、冬至とうじの日に」

重おもそうなヨロイを引きずりながら去さっていく冬將軍ふゆしょうぐんの背せ中なかに向むかって、ぼくは何か別わかれの言葉ことばを言いうべきだった。でも、どうしても「さようなら」も「ありがとう」も言いうことができなかった。どうしてここぞというかんじんなときにそんな簡単かんたんな言葉ことばが言いえないんだろう。他ほかにうまい言葉ことばも見みつからない。それでも、何か言いわなければと思おもい、

「シヨウグン！」

とぼくは叫さけんだ。そしてゆっくりと振ふり返かえった冬將軍ふゆしょうぐんに向むかってこ言いった。

「ふくはうち！」

冬將軍ふゆしょうぐんは、首くびをかしげて聞きき返かえした。

「それって、なんですか？」

「しあわせのおまじないだよ」

「しあわせのおまじない？」

「そうさ。節分せつぶんの日ひにはみんなしあわせを願ねがって、そう言いうんだ」

すると、冬將軍ふゆしょうぐんは初はじめてにこっと笑わらって、

「ふくはうち」

と言った。そして次の瞬間、庭の垣根を飛び越えて去って行った。

台所からおばあちゃんが出てきて、庭にいたるぼくに向かって

「さあ、ご飯ですよ」

と声をかけた。おばあちゃんの持っているお盆には恵方巻が山積みになっていた。ぼくは、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている顔を袖で拭いながら

「おばあちゃん、そんなに作ったって、もうシヨウグンは……」

と言った。すると、おばあちゃんは、

「これなあ、今朝はやくからせんぶ、あんたのお友だちが作ってくれたんよ」
と言った。

「なんだか知らないけど、深々と頭を下げてねえ。『お二人で食べてください』って」

「シヨウグン……」

ぼくはまた涙があふれ出した。

「それと、ここうも言ってたわ」

おばあちゃんは、冬將軍のしゃべり方を真似して言った。「『ずっとずっと、あたたかかったです』って」

五月五日（さつき晴れ）

あのあとは、変わりばえのしない日々だった。ぼくは毎朝起きると、天気の様子を見ながら洗濯物を干し、学校に通い、すもうクラブで運動をして、帰ってくると計算ドリルの宿題に頭を悩ませ、おばあちゃんと二人でご飯を食べた。その繰り返しだったので、日記を書くのは久しぶりだ。

今日は、朝からあちこちでこいのぼりが空を泳いでいた。近くの池のそばには菖蒲の花が咲いていた。おばあちゃんは、お昼にちまきを作ってくれた。

ぼくは、庭に出て納屋から鍬を取り出し、庭の日当たりのいいところを耕した。そして、何粒もかぼちゃの種をまいた。

もしも、冬將軍が今年の冬至に戻って来るなら、今からその準備をしておかなきゃと思いついたのだ。

おばあちゃんから聞いたところによると、冬至にはかぼちやを食べるのがならわらしい。

その日、もしも冬將軍が戻って来たならば、恵方巻のお礼として、今度はぼくがかぼちやの料理でもてなしてあげるんだ。

生まれ変わって何になる？

結城 博

よく晴れた五月の日曜日。

きょうは絶好のお出かけ日和だ。

出来立てほかほかのお弁当やお菓子といったしよに、ぼくはリュックサックに乗り込んだ。

「ちよっと重いかな」

リュックサックを背負ったおじさんが、ポツリとつぶやく。

（ええっ、ぼくはそんなに重たくないよ）

ぼくは、お荷物扱いされるのが嫌だった。

あのね、ぼくは、ペットボトル。おいしい新茶がたっぷり入っているよ。

「お弁当ありがとう。それじゃ、行ってくる」

おじさんは、奥さんにお礼を言うと、釣り竿とリュックサックを車の後ろ座席に乗せた。

おじさんの趣味は魚釣りだ。

「あまり無理をしないでね」

「お魚が釣れなくても、この前みたいに、お店でお魚を買ってごまかすのは、ダメだよ」
奥さんや子どもに冷やかされても、おじさんは元気いっぱいだ。

「きょうこそ大物を釣って、みんなをビックリさせてやるぞ」

車を運転しながら、おじさんは言う。

（そうですとも、頑張ってください。ぼくは応援していますよ）

ぼくは、ただのペットボトル。

人のノドの渴きを癒すことしかできない。

だけど、ぼくは人間が大好きだ。

（犬さんや猫さんみたいな『ペット』のように、ぼくたち『ペット』ボトルも、人に寄り添って、いつまでも仲良く暮らしたいなあ）

走る車に揺られながら、ぼくは、駄洒落を思いついて、くすくす笑った。

（でも、ぼくは空っぽになったら、もう人間とっしよに暮らすことはできないのかな）
ぼくは、ちよっぴり不安になった。

リュックサックの隙間から車窓を眺めると、車は山奥を走っている。

どうやら、きょうは川で魚釣りのようだ。

おじさんは、アスファルト敷きの駐車場で車から降りると、釣り竿とぼくの入ったリュックサックを背負って、歩き出した。

しばらくすると、川の水が流れる音が聞こえてきた。

「よし、きょうはここにしよう」

「それにしても、ノドが渴いたな。そうそう、リュックの中に……」

おじさんは、釣りの準備を進めながら、ぼくのキャップを開けて、お茶をゴクゴク飲み始めた。

「美味い！ こんな空気のいい場所で飲むお茶は格別だ」

まだ魚も釣れていないのに、おじさんは、もう満足そうだ。

（喜んでくれて、ぼくも嬉しいです。さあ、魚釣り頑張りましょう）

ぼくは、おじさんのとなりに座らせてもらった。

木漏れ日に、きらきら光る川が美しい。

おじさんは、時折、ぼくのお茶を飲みながら、真剣な顔で、釣り糸を垂れた川面を見つ

めている。

「おっ、アタリが来たぞ！」

おじさんの声が弾んだ。

釣り竿がグンと曲がっている。

（これは、きっと大きな魚に違いない）

ぼくも、ワクワクしてきた。

「そうだ、慎重に……」

おじさんは、自分に言い聞かせるように、ゆっくりと釣り竿を上げていく。
（もう少しですよ。落ち着いてください）

ぼくも、おじさんといっしょに釣り竿を持っているような気持ちになった。
ようやく水面に、白くて大きな、魚の姿らしきものが見えた時だった。

「プチッ」

残念、突然釣り針が外れて、魚は逃げてしまった。

「あああつ、もう……」

おじさんは、がっくりと肩を落とした。

「休憩きゆうけい、休憩きゆうけい。少し早いすこしはやが飯めしにしよう」

おじさんは、奥おくさんが作つくってくれたお弁当べんとうを食たべ始めた。

「悔くやしい。あとちょっとだったのに……」

おじさんは、すっかりふて腐くされている。

（まだまだ、勝負しょうぶはこれからですよ）

ぼくの声こえは、おじさんには決けつして届とどかない。それでもぼくは、おじさんを応援おうえんしていた。

ところが、おじさんは、ぼくのお茶ちやを飲のみ干ほすと、とんでもないことをした。

「えいっ！」

おじさんは、空からになったペットボトルのぼくを、思おもいっきり川かわへ投げ捨すてた。

ぼくは、どんどん川かわに流ながされていく。

「あああ、つまらない」

遠とおくでおじさんの声こえがした。

（どうしてこんなことをするの！）

ぼくは、何なにが何なんだか分からなくなった。

（空からっぽになったぼくは、もう用済ようずみ。魚さかなを釣つり逃のがした腹はらいせに、ポイ捨すてされた……）

ぼくは、人といっしよに暮らしたかっただけなのに。

悲しくて、涙が溢れて止まらなかった。

だけど、ここは川の中。どんなに涙を流しても、涙は川に飲まれて、誰も気づいてくれない。

ところが。

「どうして泣いているの？」

「よかったら、話を聞かせてよ」

川の水たちが、ぼくの涙に気づいてくれた。

「ぼく、ポイ捨てされちゃった」

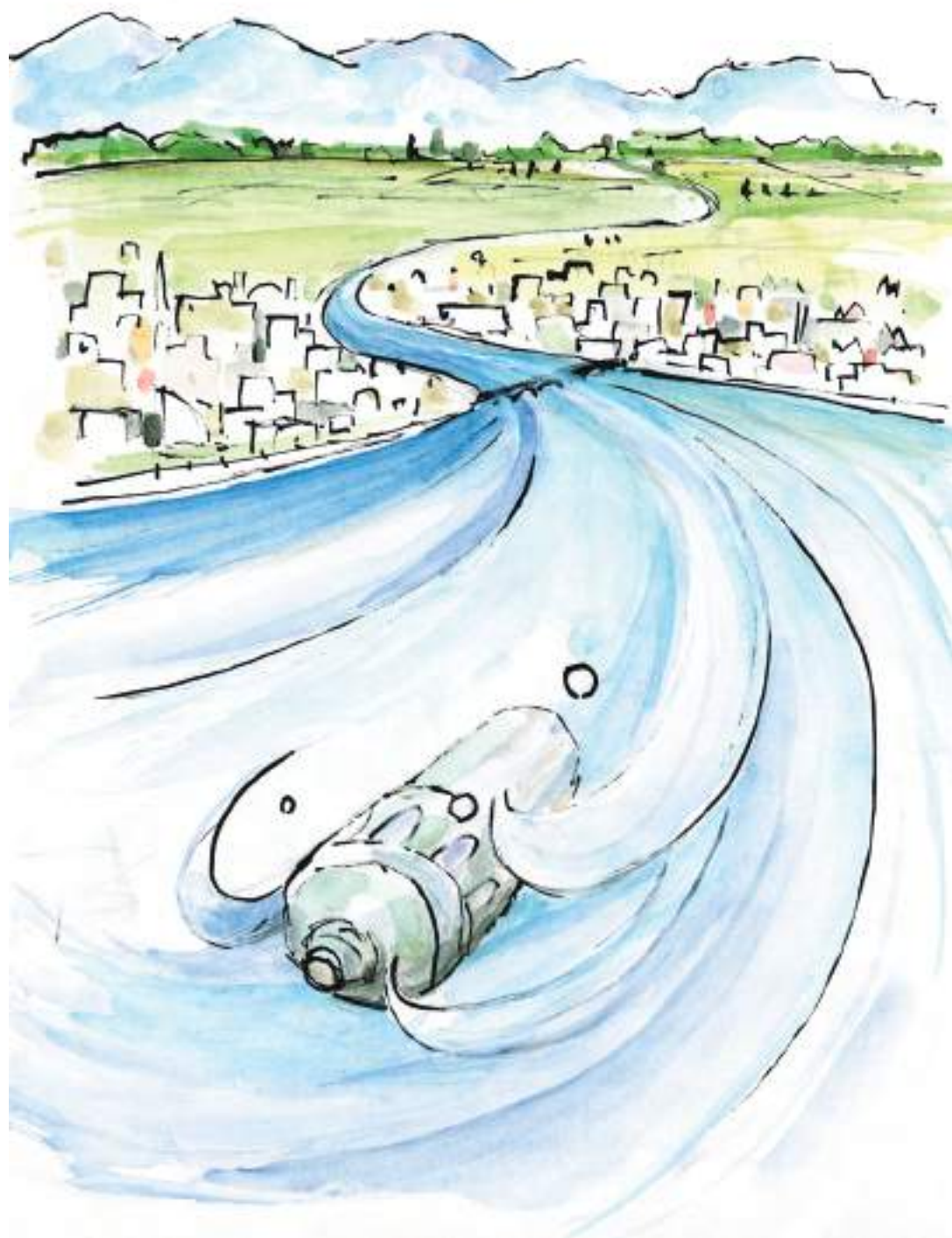
ぼくは、川の水たちに、これまでの出来事を話してみた。

「ひどいなあ。君に八つ当たりするなんて」

「自分勝手な人間なんか、大嫌いよ」

川の水たちは、口々に人間を悪く言った。

「でもね、たとえポイ捨てされても、ぼくは人を心から憎むことはできないよ。ぼくを。ペットボトルとして、この世に生み出してくれたのは、人間だもの」



「ぼくは、どんなに悲しくても悔しくても、やっぱり人間が大好きだ」

すると、川底をゆっくり流れる水が、穏やかな口調で話しかけた。

「気晴らしに、私たちといっしょに旅をしましょう。見知らぬ街や美しい風景を眺めていたら、きっと心も楽になりますよ」

（ああ、それもいい）

ぼくは、川の水たちと、流れに沿って旅をすることにした。

しばらくは川の流れも急で、森の木々しか見えなかったが、川幅が広がり流れも緩やかになると、いろいろな景色が見えてきた。

「わあ、今、大きな橋をくぐったわ」

「川沿いの道路を車がたくさん走っているね」

川の水たちは、まるでピクニックのようにはしゃいでいる。

（ちよっと、浮かれすぎだよ）

そう思ったぼくも、岸辺の草花たちに魅入られていた。

「まるで、緑の絨毯のようだ」

名も知らない草花たちが、岸辺にしっかりと根を下ろし、川の流れに抗いながらも、

いっしょうけんめい生きている。

「なんと、たくましくて美しいのだろう」

それは、人間にポイ捨てされた悲しみさえ、しばらく忘れさせてくれるような、素晴らしい眺めだった。

川は大きな水門を、幾つも越えて流れる。

「君たち、なんだか、しよっぱくなったね」

ぼくは、川の水に話しかけた。

「もう海が近いからですよ」

川の水たちは、少し大人びた声で答えた。

「これからどうするの？」

ぼくは、川の水たちに尋ねてみた。

「私たちは、これから海の水になります。そして空に昇って雲になり、雨や雪になって、また地上に戻るのです」

すっかり塩辛くなった川の水たちの話を聞いて、ぼくは気づいた。

「ぼくは、君たちとは違う」

川や海、雲、そして雨や雪に姿を変えながら暮らす彼らと違って、ぼくは、いつまでも、ただの空っぽのペットボトルのまま。

こんなゴミのペットボトルなんか、何処にも行けやしない。旅は終わりだ。

「これまでありがとう。だけど、これから先、もういっしょに旅は出来ないよ。さようなら」
ぼくは、川の水たちと別れた。

そして、海に流れ込むと、ひとりぼっちで、あてもなく海面をぶかぶかと浮いて過ごした。
ときどきウミガメさんが、ぼくをクラゲと間違えて食べようとする。

「ウミガメさん、ぼくなんか食べたたら、体を壊してしまうよ」
海の生き物たちが、プラスチックのゴミをご飯と間違えて食べて、死んでしまうことは知っている。だから、食べられないように逃げるのだ。

（ぼくは、人の暮らしに寄り添うことも、生き物の食べ物にすらなれない。役立たずのゴミなのだ）

気持ちたちが沈んで仕方がなく、それでも海面を漂うだけの日々が続いた。

しだいに、心も荒んでいく。

ある嵐の夜のこと、荒波がぼくに近づいて言った。

「随分とボロボロになったねえ」

荒波は、ぼくをしげしげと見つめた。

「そりゃあ、毎日厳しい太陽の日差しや、あなたのような荒波に晒されては、こんな姿になっちゃいますよ」

ぼくは、苦々しく答えた。

「ごめんよ、ボロボロになったのは、確かに俺たちのせいかもしれないな。だけど、本当に悪いのは、君を捨てた人間じゃないのかい」

荒波が、不意に優しくそんな声で語りかけた。

（本当に悪いのは、ぼくを捨てた人間）

疲れたぼくの心に、人間に対する憎しみの欠片が生まれた。

「俺は、海を汚し続ける人間が許せない」

「どうだい、君も人間に復讐してみないか」

荒波がぼくにささやいた。

「復讐って、穏やかじゃないな」

ぼくは、平静を装って、荒波に答えた。

「俺は、海に漂うペットボトルなんかのプラスチックゴミを、太陽の紫外線も利用して、粉々に砕くことができる」

「君も、そんな姿は、もう嫌だろう」

「……ええ、もう懲り懲りですよ」

荒波は、「ニヤリ」として話を続ける。

「俺は、人間に捨てられたプラスチックたちを、今まで数えきれないくらい見て来たよ」

「俺は、君たちを細かな粒に生まれ変わらせた。俺の復讐の手伝いをしてもらうために」

荒波の低い声が激しい風雨に混じって響く。

「さて、復讐の計画を話そうか。まず、君は粉々になって、魚たちに餌と間違われて食べ

られる。魚たちには悪いが、これも作戦だ」

「そして、魚たちに食べられた君は、その魚を食べる人間たちの体に入り込むのさ」

「ぼくは、粉々になって人間の体に入り込み、体の中で悪さをして、恨みを晴らすのかい」

ぼくは、輝きの失せた瞳で荒波を見つめた。

「そうだ。君をゴミにした人間たちに復讐するのさ。もう簡単には、回収も出来ないくら

いに粉々になったプラスチックとなって」

「人間^{にんげん}たちは、砕^{くだ}けて細^{こま}かな砂粒^{すなつぶ}のようになったプラスチックを、『マイクロプラスチック』と呼^よんでいるそうだぜ」

（マイクロプラスチックとやらになるのも悪^{わる}くないか……）

ぼくの心^{こころ}を見透^みかしたように、荒波^{あらなみ}の眼^めが、稲妻^{いなずま}に照^てらされて怪^{あや}しく光^{ひか}る。

「さあ、これから君^{きみ}は、ペットボトルからマイクロプラスチックに、生^うまれ変^かわるのだ」

ぼくは、荒波^{あらなみ}に取り込^こまれそうになった。

「だけど……」

「やっぱり、ぼくは、イヤだ！」

ぼくは、荒波^{あらなみ}の「人間^{にんげん}に対^{たい}する復讐^{ふくしゅう}」を、ギリギリのところ断^{ことわ}った。

「なんだ、つまらない。ただの意気地無^いしだったのか。それなら、こうしてやる」

荒波^{あらなみ}は、ぼくを砂浜^{すなはま}に押し流^{なが}した。

「そこで、砂浜^{すなはま}の泥^{どろ}に埋^うもれて、いつまでもがき苦^{くる}しむがいい」

荒波^{あらなみ}は、そっぽを向^むくと沖^{おき}に帰^{かえ}って行^いった。

「そうさ……これでよかったんだ」

ぼくは、誰^{だれ}もいない夜^{よる}の海辺^{うみべ}でつぶやいた。

嵐の夜から月日は流れ、ぼくがポイ捨てされてから、はや一年が過ぎようとしていた。季節は巡り、砂浜には、また初夏の爽やかな風が流れている。

その風を、ぼくは、砂浜の泥に首まで埋まって受けていた。

「ぼくの体は、自然の土には戻れない。マイクロプラスチックにはならずに済んだけれど、ずっと薄汚れたゴミで、泥の中。情けないな」

ぼくは、いつものように、それ以上考えるのはやめて、居眠りをして過ごすことにした。すると、その日は朝から、砂浜にたくさんの人が集まって来る。

（人間か。居眠りの邪魔だ。海水浴の季節でもないのに。早く帰ってくれ）

ぼくは、もう、誰にも会いたくなかった。

「お父さん、あれ、ペットボトルだ」

「そうかい、よく分からないなあ」

人間の親子が近づいてくる。

二人とも、両手に新品の白い軍手をはめて、大きなポリ袋を持っている。

「ねっ、やっぱり、ペットボトル」

「ああ、ほとんど泥に埋まっているけれど」

親子の会話に、ぼくは「ほっといてくれ」と言いたくなった。

「よいしょ、お父さんも手伝ってよ」

「わかった、任せてくれ」

親子は、軍手を泥まみれにして、ぼくを掘り出し、ていねいに泥を取り除いてくれた。

「わーい、ペットボトル一本、回収成功！」

子どもが、嬉しそうに元気な声をあげた。

「よし、ペットボトルはこっちの袋だったな」

ぼくは、空っぽのペットボトルがたくさん入ったポリ袋に、放り込まれた。

「おう、新入りだ。仲間が増えたぞ」

「こんなにボロボロになって。お疲れ様です」

空っぽのペットボトルたちが、ぼくに話しかけてくる。

「これは何の騒ぎですか？」

ぼくは、事情がさっぱり分からない。

「ボランティアの人たちが、砂浜の掃除に来たのですよ」

「ああ、ゴミ掃除に来たのか。ぼくは、あのままでもよかったのに」

ぼくは、素っ気なく答えた。

「そんなことを言っではいけません。あの人たちは、私たちをただのゴミだなんて、思っちゃいませんよ」

コーヒーのペットボトルが、ぼくに言った。

「そうですとも。私たちが入っているポリ袋に、印刷された文字を読んでみてくださいな」

ぼくは、オレンジジュースのペットボトルに言われて、透明なポリ袋に書かれた文字を読んでみた。

『リサイクル・資源回収袋』

ぼくには、まだ意味が分からない。

「私たちは、ゴミではないのです。リサイクルされる資源なのです」

「リサイクルって？ ぼくは回収されて燃やされるか埋め立てられるんじゃないの」

ぼくは、キャップが無くなった口を、ポカンと開けたままだ。

「オレたちは、リサイクルされて、新しい製品に生まれ変わるのさ」

スポーツドリンクのペットボトルが、元気よく語る。

「嬉しい……」



ぼくは、それ以上、言葉が出なかった。

耳を澄ますと、ぼくを拾ってくれた親子の会話が聞こえてくる。

「あのね、正直に言うよ。お父さんは一年前、魚を釣り逃した腹いせに、ペットボトルをポイ捨てしてしまった。『悪いことをした』と、とても後悔したよ。だから、今回のボランティア活動には、どうしても参加したかった」

よく見ると、その人は、ぼくをポイ捨てしたおじさんだった。

「正直なお父さん、かつこいい。ねえ、もっとたくさん回収しましょう」

子どもさんが笑顔で応える。

「どっちがたくさん回収できるか、競争だ」

「お父さん、わたし、負けないよ」

ぼくは、微笑みながら、泣いた。

（あの時、荒波の誘いに乗ってマイクロプラスチックになってしまっていたら、こんな幸せな気持ちには、決してなれなかった。本当に「イヤだ」と叫んでよかった）

その時、ポリ袋の隅っこで、何か考え事をしていた紅茶のペットボトルがつぶやいた。

「私たちをポイ捨てしたのは人間。泥まみれになって回収してくれたのも人間。人間って

分からない。どちらが本当の姿だろうか」

朝から始まった砂浜のボランティア活動は、夕方まで続いた。

「今回も大漁か。困ったものだ」

ボランティアのリーダーらしき人が、うず高く積み重ねられたポリ袋を見て嘆いた。

「大漁旗で飾りましょうか……あつ、いえ、本当は、こんな回収作業をしなくても、すべて

リサイクルされるのが理想ですね」

若い男の人が、冗談を言いかけて、やめた。

（そうだ、ぼくらは、人間がきちんとリサイクルしてくれたなら、あの水たちのように姿を変えて、いつまでも人の暮らしに寄り添うことができるんだ）

ぼくは、二人の話を聞きながら思った。

ぼくたちを乗せた軽トラックが、夕陽を浴びて、リサイクル工場に向かって走り出した。

「ねえ、生まれ変わって、何になる？」

「オレは、サッカーのユニホームになるぞ」

「わたし、かわいいカーテンになりたいの」

「ランドセルになって、学校に行きたいな」

ぼくたちは、自分の夢を語り合った。

みんな、楽しみにしていた遠足へ出かける子どものように、はしゃいでいる。

リサイクル工場に到着したぼくたちは、いくつかの工程を経て、「フレーク」や「ペレット」と呼ばれる粒になった。

粒たちは、新たな誕生を待つ卵のようだ。

卵たちは、無垢な透明で、きらきらと光る。

それはきっと、ぼくたちの夢が輝くから。

ぼくたちは、リサイクル工場から、別の工場に運ばれた。

「ああ、ぼくの夢は……」

ぼくの心に、海に向かう旅の途中で見た、川の岸辺に広がる草花、『緑の絨毯』が、鮮やかに広がってゆく。

「君の夢を叶えてあげるよ」

工場で、人の優しい声が聞こえた気がした。

なぜだろう。とても眠たくて……。

やがて、ぼくは目を覚ますと、同じ夢を持つ仲間たちといっしょに、若草色のカーペツ

トに生まれ変わっていた。

ぼくは、今、ビルの応接室に敷かれている。

また、人の暮らしに寄り添うことが出来る。とても嬉しい。幸せだ。

だけど、人間にゴミとして捨てられたことを、ぼくは、忘れてしまうことが出来ない。

「……次は、深刻化する海洋プラスチックゴミ汚染の現状をお伝えします……」

ぼくのいる応接室のテレビから、今日も悲しいニュースが流れる。

人間の皆さん、ぼくたちが与えられた役目を終えたとき、どうか、そっと尋ねてほしい。

「生まれ変わって、何になる？」と。

たとえ、ぼくらの声は聞こえなくても、ぼくたちの「夢」は、きっと届くと信じている。

ぼくたちの「夢」を叶えてくれるのは、人間だけだから。

思いをつなぐ しあわせプリン

みやぞの せいこ

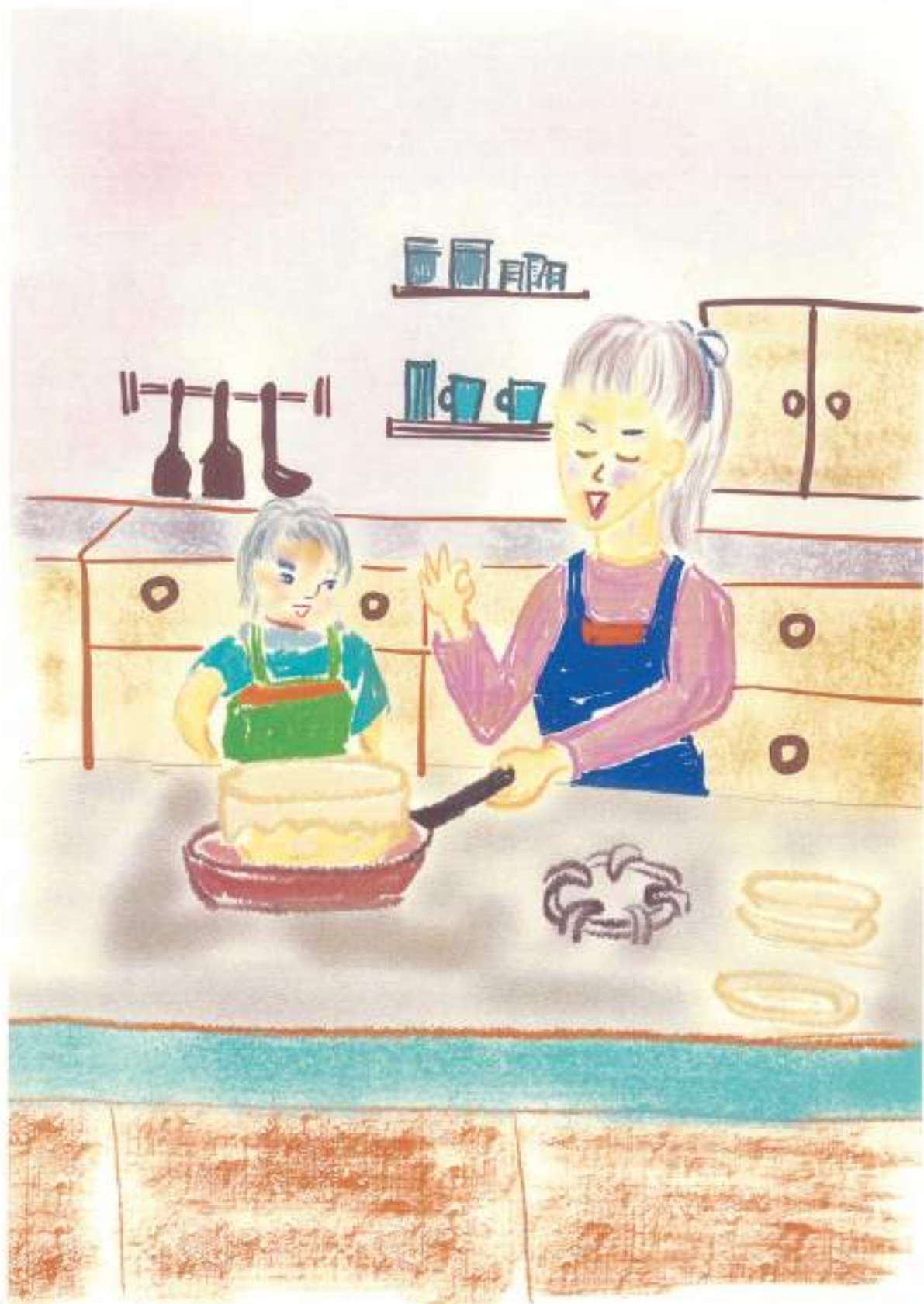
日曜日の朝です。まみこが起きると、一階のリビングは、甘い香りに包まれていました。まみこはこの香りをよく知っています。砂糖をまぜて甘くした牛乳を温めて、卵のこくをプラス、仕上げにバニラエッセンスを加えた香りです。

「プリン！ お母さん、プリン作っているんでしょう？」

まみこは、キッチンを覗きました。

「あら、おはよう。そうよ、あとは蒸すだけ。」

お母さんは、フライパンに浅くお湯を張っています。お湯が煮たったら、プリン液を流し入れたガラス容器をフライパンにのせます。ふつつつともしないくらいの、本当にごく弱火で蒸すのです。途中、水滴が落ちないように、ふたを濡れ布巾で覆うことも忘れずに。蒸され具合を見張りながら、お母さんはコンロから離れません。



「オーブンを使えばいいのに。」

まみこは言いました。オーブンなら、蒸し焼き調理機能があるので、細かい調整もいりません。チーン！と鳴ったら、完成なのよ。

「こういう細かいことが、おいしくなる秘密なのよ。」

お母さんは笑いました。

「ちはるちゃんのアドバイス？」

まみこが聞くと、

「そうよ、ばあちゃんの知恵袋。」

と、お母さんは冗談めかして言いました。まみこだって、プリン作り方くらい知っています。こうやって、お母さんが作る様子をたびたび見てきましたから。でも、まみこにはまだ、どうしてもうまく作れません。最後の「蒸す」ところで、「す」がたってしまうのです。これは火が強いための失敗です。つるんとした見た目のプリンではなく、表面にプツプツ、小さな穴がたくさん空いたプリンになってしまふのです。舌触りも滑らかではありません。それでも「おいしい」と、家族は食べてくれますが。まみこはどうも納得できないまま、最近はおっぱら、お母さんの作ったプリンを食べるばかりです。

「さあできた。あとは冷やして出来上がり。」

お母さんは満足そうです。プリンひょうめんの表面は、さっきより、落ち着いた黄色きいろをしています。つるんとキズひとつもなく、もちろん「す」なんかたっていません。今日のプリンもきつと、おいしいことでしょう。

「あー、おいしそう！ ねえ、このプリン、いつ食べるの？」

まみこは、プリンをじいっと見つめます。

「今日は、これ持って、ひいばあちゃんちに行こうと思ってるの。まみこも行く？」

「えっ、ちはるちゃん、帰って来ているの？ 行く！」

まみこの顔は、パツと明るくなりました。

「ちはるちゃん」とは、まみこの曾祖母そうそぼ、つまり、ひいおばあちゃんのことです。「ちはるひいおばあちゃん」とは呼びにくくて、まみこは小さい頃から「ちはるちゃん」と呼んでいます。数年前に、ひいおじいちゃんが亡くなったあと、ちはるちゃんは高齢者施設で生活しています。一見すると元気そうなのですが、米寿のお祝いも近くなってきました。ちはるちゃんは年々、家の階段や段差につまずき、小さなケガをするようになったのです。大きなケガにならないうちにと、入所を決めたのでした。でも週末や、年末年始は家に

帰^{かえ}ってきます。ちはるちゃん家は今^{いま}、ちはるちゃんの娘^{むすめ}夫婦^{ふうふ}、つまりまみこのおじいちゃんとおばあちゃんが住^すんでいます。

午後^{ごご}、出来上^{できあ}がったプリンを持^もって、まみこはお母^{かあ}さんと出^でかけました。

「こんにちはー、来たよー。」

お母^{かあ}さんが声^{こえ}をかけました。玄関^{げんかん}には、ちはるちゃんが愛用^{あいよう}している、花柄^{はながら}のステッキがかけてあります。

「あらあら、二人^{ふたり}ともいらっしやい。」

おばあちゃんたちより早く、ちはるちゃんが声^{こえ}をかけます。段差^{だんさ}を心配^{しんぱい}する周囲^{しゅうい}をよそに、まみこたちを出迎^{でむか}えようと立上^{たちあ}がります。

「ばあちゃん、座^{すわ}っててよ！ 転^{ころ}んだら危^{あぶ}ないから！」

お母^{かあ}さんが一人掛^{ひとりか}けソファ^がーに、ちはるちゃんを座^{すわ}らせます。

「あらまあ、そんなに怒^{おこ}らんでえー。」

ちはるちゃんは、怒^{おこ}られているのに、ケラケラ笑^{わら}っています。

「そうそう、プリン持^もってきたの。ちようどおやつの時^じ間^{かん}だし。みんなで食^たべようよ。」

お母^{かあ}さんは、保冷^{ほれい}バツグからプリンを取り出^としました。長^{ちよう}方^{ほう}形^{けい}の耐^{たい}熱^{ねつ}ガ^らスの容^{よう}器^きから、

食べる分だけを大きなスプーンですくって取り分けます。プリンカップもいいけれど、まみこにはこっちのほうが断然おいしく感じます。すくった容器の底に見えるのは、濃いカラメルソースの海。

「ああ、おいしいねえ。力がみなぎってくるよ。ありがとうねえ。」

ちはるちゃんは、目をいっそう細めておいしそうに食べています。

「ばあちゃん直伝のレシピだもの。遠慮せずいっぱい食べてね。」

プリンをすすめるお母さんは、ちよつと照れています。まみこもプリンを食べました。甘くて冷たくて、つるんと喉を通ります。後味に残るカラメルのほろ苦さは、プリンの甘さを引き立てて、まさに絶妙です。

「はー！ おいしいー！ おかわり！」

プリンを食べたあと、まみこは、ちはるちゃんと折り紙をしました。ちはるちゃんの手から手品のよう、折り紙の花や動物が生まれます。

「そういえばさ、お母さんにプリンの作り方教えたのって、ちはるちゃんなんですよ？」

まみこは訊ねました。

「ああ、そうだよ。」

「じゃあさ、ちはるちゃんはプリンの作り方、だれに教えてもらったの？ やっぱりお母さんとか、おばあちゃん？」

まみこの質問に、ちはるちゃんは折り紙の手を止めます。

「ああ、話してなかったかね。あたしがプリンを初めて食べたのは、まみちゃんくらいの歳でねえ。そうだね、まだ日本が戦争をしているころだね。」

「戦争をしているころ……。」

まみこは、ごくりと唾を飲みこみました。

ちはるちゃんには、お兄さんが二人、すぐ下に妹と、まだ小さな弟がいたことは、まみこも知っています。五人のきょうだいくらい、昔は普通だったそうです。

「一番年上の兄さんは戦争に行っているし、あたしも家の手伝いをしたよ。小学校が終わってからね。畑もあつたし、一番下の弟は体が弱かったからねえ。しょっちゅう寝込んでいたよ。」

当時、ちはるちゃんの実家は、農業を営んでいました。街の中心部から離れた村で、空襲にもあわずにすんでいたそうです。農作物の収穫で、家族や村人は飢えずに暮らしていたといえます。ときには都会から物々交換に来る人にも、食べ物分けました。それに

しても……。と、まみこは思います。小学生も大人と一緒に働くなんて。まみこは五年生ですが、考えただけでクタクタに疲れてしまいそうです。

「いつだったかね、村の外れに若い兵隊さんが倒れていたんだ。大きな荷物を背負ってた。」
「だれだったの？」

「うわさでは隣の村の山手に、アメリカ軍の飛行機が不時着した、って話を聞いた。脱走兵がいたとも。」

脱走兵と聞いて、まみこはぞくりとしました。

「その人だったの？ アメリカ人？」

「おそらく。アメリカ兵は敵だと教えられてただけだね、あまりに弱ってたもんで。気の毒に思ってた村の人たちで、診療所に運んだんだ。」

「こわくなかった？ アメリカ人の脱走兵でしょう？」

まみこはこわごわ聞きました。

「いいや、全然。それくらい弱ってたんだらうね。だから、うちの使っていない納屋でかくまってた。ひどいケガもしていたようだったからね。」

まみこは、頭がくらくらしてきました。アメリカ人の脱走兵をかくまう。あれ、何の話

だったけ。プリンにつながる糸口は、今のところ、全く見えません。ですが、ちはるちゃんの話の続きは気になります。

「兵隊さんは、だんだん元氣になってね。驚いたことに、日本語が喋れよった。畑に出せば、天気やら野菜なんかに詳しくなったもんで、みんなもそりゃあ驚いていたよ。」

ちはるちゃんは、楽しそうに話します。

「いい人だったんだね、その人。」

「そうそう。そんである日、兵隊さんが、何かお礼がしたいと言いだしてね。うちの土間で、プリンを作ってくれたんだ。」

「えっ？ どういうこと？」

まみこは、戦時中の出来事と、やっと話に出てきたプリンが、どうしても結びつきません。不意打ちをくらった感じがします。

「鶏の卵に、飼っていたヤギの乳、ほんの少しの砂糖、あとはカボチャを潰してね。混ぜてこして、茶碗に入れて、蒸し器で蒸したら、プリンのできあがり。そう作り方を教えてくれたんだが、兵隊さんはとにかく、手際がよかったねえ。」

まみこは今朝、お母さんのプリン作りを思い出していました。材料の卵やカボチャはと

もかく、ヤギの乳、砂糖はほんの少し。カラメルなんて、まずないでしょう。

「ええー、それで、おいしかった？ そのプリン…。」

まみこはあんまり期待せずに聞きました。

「もちろん！ 甘くてやわらかくてねえ。茶碗蒸しみたいなのに、そうじゃない。そりゃあ、今みたいなきれいなプリンじゃなかったけどねえ。外国の人は、こんなにおいしいものを食べているのかって、家族みんなで驚いたんだよ。」

ちはるちゃんは、興奮気味に話します。

「特に、一番下の弟がねえ。そりゃ喜んでねえ。いつもいつも青白い顔して寝付いていたのに。兵隊さんの作ったプリンなら、パクパク食べて、おまけに元気になったって、家族じゅう大喜びだったんだよ。」

まみこは、うんうんと頷きました。ここは理解できる気がします。プリンの基本的な材料は、牛乳、卵、砂糖です。どれも栄養豊富で、体の中で力の源になる食材だと、家庭科の授業で習いました。

「だから、いつのまにか、その兵隊さんがうちにいるのが普通になってたよ。弟もずいぶんなついてたからね。だけどね…。」

ちはるちゃんは、遠くを見ました。

「だんだん戦争が激しくなつて、あたしらに住んでいた村も、空襲を受けるようになったよ。」

村人総出で防空壕を掘ったり、水をためておいたり。ちはるちゃんたちは、すぐ避難できるように準備していたそうです。だんだんアメリカ軍の機銃掃射も始まって、近くの村の被害も聞かれるようになってきたのです。

「アメリカ兵をかくまっているって、ひどい言われ方もされたけど。今さら、兵隊さんを追い出すつもりはなかったよ。」

ちはるちゃんは、ふん、と鼻を鳴らしました。

「その日も空襲警報が鳴ったんで、みんなで防空壕に逃げただけど。」

「だけど？」

「下の弟が逃げ遅れてね。まずいと思ったんだらう、兵隊さんがすぐ家に戻って、連れ出してきてね。火の粉を浴びないように、布でくるんで脇に抱えて。防空壕に向かつて走って逃げてきた。でも……。」

淡々と話していたはずのちはるちゃんの声が、いつからか震えています。

「ちはるちゃん、大丈夫？」

ちはるちゃんの肩にそっと手を添えて、まみこははっとしました。ちはるちゃんの一番下の弟さんは、空襲で亡くなったと、まみこも聞いていたからです。ちはるちゃんは、ふりしぼるように続けます。

「こっちに走ってくるのは見えた。もう少ししてところで二人とも、いっぺんに。」

焼夷弾を落とす飛行機が飛び去って、辺りの煙が静まったころ、ちはるちゃんたちはそろそろと、防空壕から出ました。見るとすぐ近くに、兵隊さんと弟が倒れています。二人とも、もう息はありませんでした。

「兵隊さんはね、弟を抱きかかえたまま、かばうような格好だった。」

まみこは、ちはるちゃんの背中を、やさりながら話を聞いていました。ちはるちゃんはまだこの前ではいつも明るく、元気に笑っています。今みたいに声と肩をふるわせて、背中をよりいっそう丸くして話すちはるちゃんを、まみこは初めてみました。つらい戦争の記憶は、戦争が終わってからずっと、ちはるちゃんを苦しめてきたのでしよう。

「でもね、それからすぐに戦争は終わった。次の年の春になって、亡くなった兵隊さんの家族が、遺骨を引き取りに来てくれて、あたしらもそれはそれは喜んだよ。ああ、終わっ



「たんだって泣いた気がする。」

ちはるちゃんは、穏やかな口ぶりに戻っていました。

「大人になって、ひいじいちゃんと結婚して。生活は楽じゃなかったけどね、あたしは生きていくんだからって、いつも奮い立たせていたよ。」

ちはるちゃんの歩んできた道は、まだ十一歳のまみこには想像もつかないほど、大変だったことでしょう。

「だけどね、つらいときや、ここ一番の頑張りときには、プリンを作っていたよ。おばあちゃんもお母さんも、まみちゃんも食べてきたプリンよ。」

そう言ったちはるちゃんの顔は、いつもと変わらない、しわくちやの柔らかい笑顔に戻っていました。

「プリンは栄養満点なんだ、力がみなぎって心も体も元気にしてくれるんだから。」
懐かしそうに話すちはるちゃんに、うんうんと、まみこも頷きます。

「プリンにそんな思い出があったなんて、わたし全然知らなかった。ああでも、聞けてよかった。ちはるちゃん、ありがとう。」

まみこは、ほっとして言いました。

「お母さんかあもこの話はなし、聞いたの？」

「ああ、話はなしたと思おもうよ。」

ちはるちゃんちはるちゃんが、仏壇ぶつだんの方に目配せめくばをしました。見ると仏壇ぶつだんには、プリンが供そなえてあります。

「お母さんかあたら、いつのまに。」

ちはるちゃんちはるちゃんは嬉うれしそうに笑わらっていました。

帰かえりの車くるまの中なかで、お母さんかあが言いいました。

「ばあちゃんばあちゃん。あつ、ちはるちゃんちはるちゃんね。本ほん当とうにプリンが好すきよね。喜よろこんでもらえてよかったわあ。」

「うん。プリンは、ちはるちゃんにとつて、大たい切せつな思おもい出での食たべ物ものだったんだね。」

まみこも、領うなきずながら言いいました。

「お母さんかあもね、ちはるちゃんとおしやべりしながら、よく手て作づくりプリンを食たべたのよ。ちようど今日きょうのまみこみたいだね。」

お母さんかあは、懐なつかしそうに言いいました。まみこは、思おもい浮うかべます。こども時じ代だいのお母さんかあが、ちはるちゃんちはるちゃんと手て作づくりプリンを食たべているところ。きっとそんなときに、お母さんかあ

んもちはるちゃんから、さっきの話を聞いたのでしよう。

つらい出来事は、人に話すと少し軽くなると、まみこは思っています。ですがまだまだちはるちゃんの悲しみは深く、この先も忘れることはないでしょう。戦争は、まみこのお母さんも、おばあちゃんも、経験したことはありません。だからこそ忘れてはいけない、忘れないために、何らかの形で残さないといけません。まみこたちにとって「プリン」は確かに、その役割を担っているように思います。

「よし！ こうなったら、プリンの作り方、わたしもマスターするぞ！」

まみこは力強く言いました。

「ええ？ 何？ まみこ、どうしたの急に。」

お母さんが驚いています。

体にも心にも、栄養満点のプリン。まみこが目指すのは優しい甘さで、喉ごしは滑らかな、もちろんおいしいプリンです。大切な誰かを思いながら、細かいところも丁寧に作る。車の窓から見える、夕方のひつじ雲をながめながら、まみこは思いました。

総 評

子どもたちの夢を育み、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」は、今年で第四十二回を重ねることができました。応募してくださった方をはじめ関係者の皆様の御協力に深く感謝します。応募数は、全国三十八都道府県から、第一部（保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童向け）に九十九点、第二部（小学校中・高学年児童向け）に百六十六点の総計二百五十六点でした。

応募作品のジャンルも、体験を基にした生活童話、ファンタジー、郷土に伝わる伝説等に題材を得た作品など、多様な種類の創作童話で力作ぞろいでした。家族愛、思いやり、友情、信頼、自然愛、希望など、募集の趣旨に沿った作品が寄せられました。多くの方が、次代を担う心豊かな子どもを育成したいという願いのもと、「子どもに聞かせたい創作童話」を創作されたことが、一番の子どもたちへの贈り物だと思います。

子どもたちの感性や価値観は、実に純粋でストレートであり、旺盛な好奇心に支えられています。だからこそ、子どもたちに読ませたい、聞かせたい童話の創作には、どれだけ子どもの視点に立つことができるかが必要になります。今回、入賞された作品は、子どもの特性や感性を深く理解しながら、子どもの視点にたって創作されたものでした。ですから、子どもたちがこれらの作品に触れたとき、自分が共感できる言葉や考え、ストーリーの展開であることを感じ、お話そのものの面白さを感じるようになります。

今回、応募された作品のほとんどが、子どもたちが親しみやすく、平明で読みやすい文章で書かれました。これは、作者の方々が、子どもの視点に立った作品づくりを目指していることの表れであると感じました。ただ、審査の中で、作品の題名と内容が合わず、子どもたちに伝わりにくくなっている作品も散見されるとの意見もありました。子どもたちが、作品を手にしたときに、思わず読んでみたいと感じるような題名になるような工夫もお願いしたいと思います。

中には、難しい言葉遣いやテーマの一貫性に一考を要する作品もありましたが、総じて読みやすく、比喩表現を効果的に活用するなど、年齢や学年の段階を考慮した表現上の工夫も見られました。作品集は今後、学校・幼稚園などで教育資料として教育活動に活用されることもあるので、今後も表記・表現については丁寧に扱う必要があると考えます。

以下、各部ごとに、審査で話し合われた内容をお示しします。

〈第一部〉

全体的に感じたこと

○ 第一部は、保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童を聞き手（読み手）としている。これを意識して、登場人物の設定や場面の展開等を工夫している。楽しく読み進めることができ、心温まる作品が多かった。

一方、対象となる聞き手（読み手）には、難しいと思われる主題や文章表現がある作品も見られた。対象を意識した創作をお願いしたい。

○ 個性的な登場人物たちが様々な物語を展開していく作品が多く、楽しく読めた。一方で、発想や着想は面白いのだが、説明の部分が不足していたり、物語の設定や展開が分かりにくかったり、山場が物足りなかったりして、主題が明確でない作品があった。

○ 子どもの空想性に働きかけるファンタジー作品は現実と空想が交錯する面白さがある。物語が現実から空想へ変わっていくときに、聞き手（読み手）が違和感をもたないような工夫をしてほしい。

〈第二部〉

全体的に感じたこと

○「子どもに聞かせたい創作童話」という趣旨に沿った、楽しく夢のある作品や感動あふれる作品が多かった。

○ 第二部は、小学校中・高学年児童を聞き手（読み手）としている。そのため、家族愛、思いやり、平和、友情、協力、勇気、心の葛藤など、子どもたちを取り巻く様々な問題をテーマに、作者の思いや願いを表現した作品が多くみられた。

○ 登場人物の設定や場面の展開が明解で、期待をもって読み進めることができる作品が多かった。一方、山場がなく平板な構成になっていたり、結末に向かう中で主題が不明確になったりする作品もみられた。構成段階での練り上げが大切である。

○ 会話を効果的に生かし、情景を伝えている作品が多く、対象とする子どもたちにも場面の様子や登場人物の人物像が伝わるよう工夫されていた。

入賞作品の選評

〈第一部〉

特選 「おしゃれな百地蔵」

阿部 忠彦

○ 民話風の話がテンポよく流れていて、低年齢の子どもたちにしては少し難解な言葉も散見されるが、「ひいふうみいよう…」という古来の数え方が、子どもたちの心に残るのでは。

○ 村の百地蔵の世話をしている八兵衛の、いつも地蔵様をきれいにしておきたいという一生懸命さがよく描かれているし、(このことが後半の話に大いに関係してくる大切な部分) また、八兵衛が、毎日点検する「ひい、ふう、みい、よう」というおもしろい声を聞いて、母狸にたずねた子狸は、本当に百あるか数えてみようと興味をそえられる。子狸が一生懸命に数える様子もほほえましく描かれている。たくさん物を数えるとき、途中でどこまで数えたか分からなくなるとい子狸のとまどいにも、子どもたちは共感できると思う。

○ 後半では、二人のそれぞれの一生懸命さが交互にくり返されて、お互いの思いが理解されないまま、読む者ははらはらせるが、おしまいは、顔は直接合わせないものの、八兵衛と子狸の心が通じ合うというほっこりとした楽しい話になっている。

○ しかし子狸が付けた地蔵の頭の赤い印を見つけた村人たちが、八兵衛に「なまけとらんと早う、地蔵様の頭をそうじせんかい」と言いつのる場面があるが、話の中の一部分とはいえ、せっかく全体がほっこりとした話になっているのに、そんなあたたかい雰囲気をごわしているような気がする。村人たちもきつと八兵衛と同じように百地蔵への信仰も親しみも深いに違いないし、世話をしてくれる八兵衛に対しても感謝の気持ちを持っているに違いないからだ。この部分をもっとやわらかい言い回しに考えてみるのも一考だと思う。

入選 「びっくりさせちゃうぞ」

向風 歩

○ 小さくてまるいふうせんのような姿で、人にはまだ見えない子どものおばけ。人をびっくりさせることで大きくなり、人にも見えるようになるという独創的なおばけの発想がおもしろい。

- フウのお父さんは大入道で、お母さんは吸血鬼という、おどろおどろしいおばけ一家だが、大入道のお父さんは、お化屋敷で働いていて、お母さんはお供のコウモリをいっぱい従えて、こわい映画の大スターというのも読む子どもたちをほっとさせそうだ。また、子どもたちは、初めて、見知らぬ世界にふみ出すフウの、不安な気持ちや、早く大きくなりたいという思いで勇気を出して、人間の町へ飛んでいくフウの気持ちにも寄りそいながら読むことだろう。
- 町に出たフウ。ただびっくりさせようと思ってしたことが、意に反して、人を悲しませたり、仕事のじゃまをしたりすることにつながり、悩みはじめる。でもぐうぜん、橋の上でサイフを落とした女の子を助けたことで、「みんなが笑顔になるびっくり」だってあることに気づき、「これからは、そんなびっくりをたくさんさがすぞ」と、暗くなっていた心に元氣を取りもどす。
- そんなおばけのフウの優しさが伝わるあたたかい話だ。
- 短く、平明な文章で書かれているので、低年齢の子どもたちでも、フウの心の動きにそいながら読み進めていけるいい作品だと思う。

入

選 「ニッツとヤールののはたけしごと」

鵠沼 更紗

- イソップ寓話をよんでいるような、ユーモアいっぱいの童話である。ニッツとヤールの、「ぼくは、ここで見はっているから」―「それはよいかんがえだね。」というフレーズの繰り返しは、二人の対照的な性格を際立たせ、読者を次第に童話の中に引き込んでいく効果がある。また、イソップ寓話などの昔話で多用される、戒めにつながるような結末とは異なり、ヤールはどんな目に遭っても、疑いもせずニールを信じ抜き、ニッツはお城での体験を通して考えや行動を改め、二人仲良く暮らしていくというハッピーエンドが、現代の子どもたちの心を温かくしてくれるのではないかと思う。

- 対照的な兄弟の人物像は、この童話の大切なプロットとなるので、ニッツの行動描写にある「すやすや」を「ぐうぐう」にするなど、登場人物の人間性を表す表現を工夫すると、さらに面白い作品になると思う。

入

選 「やまとくんのたからもの」

弓場 貴子

- 抜けた人間の歯を、ねずみが宝物と交換してくれるという発想が面白い。また、ねずみの歯医者者のチュー先生や新

《第二部》

特 選 「冬將軍日記」

関根 裕治

しい齒を熱望するねずみたちの姿もユーモラスに描かれていて楽しい。やまとくんは「たからもの」を手に入れるために、ねずみたちは「新しい齒」を手に入れるために、一緒に嘆いたり、力を合わせたりする姿は、読者の共感を呼び、心をほっこりさせてくれる。現実とは違うけれども、ひよっとしたら自分の周りでも起こっているかもしれないと、若い読者の心をワクワクさせてくれる作品である。

○ タイトルにある「たからもの」が何を指すのか、一読しただけではわかりにくい。お母さんのために、紙粘土で一生懸命花を作るけれどもうまくいかない場面があると、タイトルやラストの場面が理解しやすくなるのではないかと思う。

○ 「今日からぼくは、日記をつけることにした。」という出だしが子どもたちにとって身近で、ずっと物語に入っていくことができる。実在しない「冬將軍」を人物に仕立て、季節の行事を通した僕と冬將軍とのやりとりがほっこりする作品となっている。

○ 出番がないことを嘆く冬將軍と僕は、おばあちゃんが作ったおせち料理やだんご汁を食べたり、花札やトランプをしたりしながら日を重ねるごとに仲良くなっていく。いよいよお別れの日がやってきた時、言うべき言葉がみつからない僕が言ったのは「ふくはうち!」。冬將軍の幸せを願う気持ちが詰まったこの一言にグッとくる。

○ おばあちゃん存在もこの物語に温かみを添えている。ヨロイとカブトを付けた冬將軍を見た時、「ほら、うちに上がるときはそんなコートや帽子は脱ぎなさい。」と言ったのは、見えているのに見えていないふりをしたおばあちゃん優しいさではないかと思う。冬將軍が出ていった後、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっている僕に、「これなあ、今朝はやくからぜんぶ、あんたのお友だちが作ってくれたんよ」と言う下りは、読者をしんみりさせる。読み手によつては、架空の冬將軍とおばあちゃんのやりとりに違和感をもつ場合も考えられるので、おばあちゃんも子どもの頃に見たことがある等、冬將軍とおばあちゃんの接点についての記述が少しあると物語がさらにすんなり読み進められると思う。

○ 「こはるびより」「うららか」「しぐれ」など、残したい季節を表す日本古来の美しい言葉や風習が、おばあちゃんと僕とのやりとりで誰にでも分かりやすく描かれている。改めて大切にしたいと思わせる。

○ 捨てられたペットボトルの旅の物語を通して、海洋プラスチックゴミ汚染の問題について、学び、考えることができる作品である。「ペットボトルが捨てられるという事件」「失意の川の旅、そして、人間への復讐を囁く荒波の誘惑」「人間の資源回収活動による救出」「夢であったカーペットに再生」と、起承転結がしっかりしており、ペットボトルが語り手となっている面白さがある。また、海洋プラスチックゴミ問題を引き起こしているのは人間であるが、それを解決できるのも人間であるという希望を語る物語であり、高学年の児童が読むのにふさわしい内容・構成となっている。

○ 川に捨てられたペットボトルが、川の景色を見ているうちに元気になっていく場面は、「スイミー」のワンシーンを思わせたり、人間の矛盾する側面を指摘した「人間って分からない。どちらが本当の姿だろうか。」という紅茶のペットボトルの言葉は、「手袋を買いに」の最後の場面を思わせたりするなど、他の児童文学のワンシーンと重ねて読む楽しみもある。

○ ペットボトルが資源の循環サイクルの中に組み込まれて、緑の絨毯に生まれ変わるというラストに向けて、前半の川の旅の場面では、水の循環のことが語られたり、緑の絨毯のような草花に魅入られた様子が描かれたりと、伏線が散りばめられた巧みな構成になっている。

○ 環境問題について学べる作品であるが、「物語」をしっかりと描くことをもう少し大切にするとよいのではないかという印象をもった。知識を伝えることを意図していることが明らかに感じられる解說的な叙述や会話文が散見されるが、それよりも、中心人物の心情の変化を丁寧に描き、「ぼくは、微笑みながら、泣いた。」というクライマックスを際立たせる工夫することに注力した方がよかったように思う。

例えば、荒波の誘いに対して大きく揺れ動く心を丁寧に描く。あるいは、砂浜に打ち上げられて無為に過ごす場面においては、荒波の誘いを断った自分の決断を肯定したり後悔したりする様子を描く。また、ペットボトルは、捨てられたことを忘れられずにいたわけであるから、回収作業に来たのが、自分を捨てたおじさんであることに気付いても不思議ではないはずである。したがって、なぜ、おじさんは回収作業をしているのかが気になって仕方がないという描写を加える。そうすることで、「人間が大好きであった自分」「荒波からの誘いを断った自分」を肯定できて、人間への不信任や自分の存在意義の喪失感が消え、幸せな気持ちになるというクライマックスが、読み手の心に響いて、環境問題についてより考えさせる作品になったのではないかと思う。

○ 食は、そのおいしさを人で人を幸せな気持ちにしてくれる。食のもつ栄養で体を元気にしてくれる。でも、それだけではない。食には、それにまつわる思いが込められていて、それも含めて作り、味わうものであること、そして、その思いをつなぐのは、家族愛であったり平和を願う心であったりするということを感じさせてくれる物語である。最初は、プリンの詳細な描写に対して、なぜプリンなのかという印象ももったが、読み進めるうちに曾祖母や戦争の話とつながってきて、プリンの詳細な描写がぐっと意味をもってきた。そして、「つらいときや、ここ一番の頑張りときには、プリンを作っていたよ。」や「プリンは栄養満点なんだ。力がみなぎって心も体も元気にしてくれるんだから。」という曾祖母ちはるちゃんの言葉には、戦争の悲劇や過酷な生活を乗り越えた者の含蓄が感じられた。

○ 現代っ子であるまみこのもつプリン観は、曾祖母であるちはるちゃんのプリンの話によって変わっていく。そして、うまく作れないという理由でプリン作りをやめていたまみこが、「体にも心にも栄養満点のプリン。優しい甘さで、喉ごしはなめらかなプリン」作りを目指すことを決心する。まみこは変わったが、プリンづくりの思いは変わることなく、曾祖母から曾孫へとつながる。物語におけるテーマと中心人物の果たす役割がしっかりとしている作品であると思う。

○ プリンをつくる時の手間が丁寧に描写されている。また、プリンの見た目や味、のど越しまで描写が細やかで、とてもおいしそうである。「耐熱ガラスの容器から大きなスプーンですくって取り分けます。プリンカップもいいけれど、こっちの方が断然おいしく感じます。」という叙述にも妙に納得してしまう。一方、曾祖母ちはるちゃんが声と肩をふるわせて語る戦時中の出来事は、悲劇的で、今でもその苦しみを背負っていることが伝わってくる。このコントラストも本作品の特徴であり、戦時中と現在とに隔世の感がある印象とともに、実はプリンがつかないというあたりも巧みである。

「第42回 子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項

子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集いたします。

- 1 応募資格 高校生以上（16歳以上）の方でアマチュアに限る
- 2 作品の種類 創作童話、体験談、地方に伝わる民話に題材を得た作品などの「子どもたちに聞かせたい話」
- 3 応募規定
 - ☆ 第1部 保育園児、幼稚園児、小学校低学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 10枚～15枚
 - ☆ 第2部 小学校中、高学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き） 15枚～20枚
 - ☆ 表紙は枚数に含めません。各ページにページ数を記入してください。
 - ☆ 原稿はA4判の400字詰め原稿用紙を使用し、右肩をとじてください。（ワープロ原稿も可）
 - ☆ 作品は自作未発表でほかの童話賞等へ応募中の作品でないものに限りません。（公募で入賞した作品等の内容を加筆、訂正した場合も応募できません。）
 - ☆ 応募は、各部につき一人一作品に限りません。文体は自由です。
 - ☆ 表紙に、第1部・第2部の別、作品の題名、住所（郵便番号も記入）、氏名（ペンネームの場合は本名も書き添えること）、性別、年齢、職業（学校名）、電話番号、お持ちの方はメールアドレスを記入してください。
 - ☆ 人名、地名等の固有名詞には読み仮名をつけてください。
 - ☆ 民話、伝説等を題材とした場合は、その出典を明示してください。
 - ☆ 応募作品は返却いたしません。
 - ☆ 応募作品の著作権は応募者に帰属。主催者は入賞作品を冊子にまとめる権利を有します。
- 4 応募の締切 令和2年9月12日（土） 消印有効
- 5 選考委員（50音順・敬称略）
 - 有村 真由美 （鹿児島県学校図書館協議会会長 鹿児島市立草牟田小学校長）
 - 上野 恵美 （鹿児島童話会理事）
 - 内村 英人 （鹿児島市小学校国語部会会長 鹿児島市立喜入小学校長）
 - 田之上 由美 （鹿児島市立図書館図書係主幹）
 - 花山 潤治 （鹿児島県美育協会会長 鹿児島市立犬迫小学校長）
- 6 入選者発表 令和2年11月下旬頃
かごしま近代文学館かごしまメルヘン館ホームページ上にて発表します。
結果通知は、入選者のみとさせていただきます。
- 7 表彰式 令和3年2月21日（日）
- 8 賞
 - ☆ 特選（各部1編）…賞状及び楯、賞金5万円
 - ☆ 入選（各部3編）…賞状及び楯、賞金3万円
 - ☆ 佳作（各部数編）…賞状
- 9 主催 鹿児島市、鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団

応募状況

■ 応募総数

第1部	99点
第2部	106点
総数	205点

■ 年齢別応募状況

部門別	第1部	第2部	合計
16～19歳	0	2	2
20～29歳	4	8	12
30～39歳	13	10	23
40～49歳	21	13	34
50～59歳	22	23	45
60～69歳	22	26	48
70～79歳	12	14	26
80～89歳	2	8	10
90歳～	1	0	1
不明	2	2	4
合計	99	106	205

■ 都道府県別応募状況

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数
東京都	30	京都府	6	福島県	2	福井県	1
鹿児島県	29	福岡県	6	茨城県	2	山梨県	1
大阪府	19	山口県	5	新潟県	2	静岡県	1
千葉県	11	長野県	4	滋賀県	2	和歌山県	1
神奈川県	11	広島県	4	徳島県	2	鳥取県	1
兵庫県	11	群馬県	3	宮崎県	2	高知県	1
愛知県	10	奈良県	3	岩手県	1	熊本県	1
埼玉県	8	香川県	3	宮城県	1	沖縄県	1
岐阜県	7	長崎県	3	秋田県	1		
北海道	6	青森県	2	富山県	1		

選考委員

(五十音順)

有村真由美氏(鹿児島県学校図書館協議会会長 鹿児島市立草牟田小学校校長)

上野 恵美氏(鹿児島童話会理事)

内村 英人氏(鹿児島市小学校国語部会会長 鹿児島市立喜入小学校校長)

田之上由美氏(鹿児島市立図書館図書係主幹)

花山 潤治氏(鹿児島県美術協会会長 鹿児島市立犬迫小学校校長)

表紙絵・xし絵

(五十音順)

榎本 容好氏(鹿児島市芸術文化協会会員)

花山 潤治氏(鹿児島市立犬迫小学校校長)

「子どもたちに聞かせたい創作童話」

第 42 集

発 行	令 和 3 年 2 月
編集者	鹿 児 島 市 鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 公益財団法人かごしま教育文化振興財団 鹿 児 島 市 城 山 町 5 番 1 号 TEL (099) 226-7771
印刷所	(株) あ す な ろ 印 刷 鹿 児 島 市 城 西 2-2-36-205 TEL (099) 214-3757

